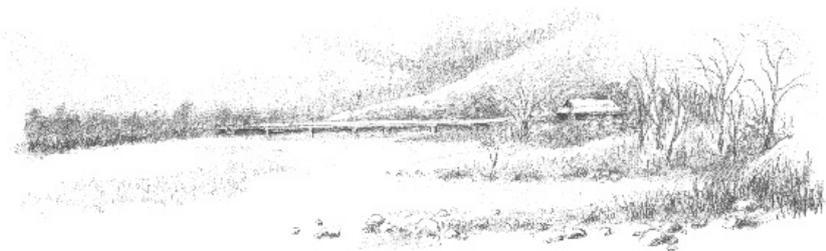


やまきた文化

'23-3 * No.42



宍粟市山崎文化協会



「最上山公園もみじ山」の 歴史をふりかえる

宍粟市山崎文化協会長 前野良造

もみじ山の紅葉が見ごろを迎えた十一月中旬、山崎小学校四年生が野外授業「しろう森林の探検隊」としてもみじ山を訪れた。「もみじ山」と「もみじ祭り」の歴史を紹介してほしいと依頼され、この機会に「もみじ山」の歴史をふりかえてみた。

昭和七年、野口雨情が来崎して「山崎小唄」や「宍粟民謡」などを作詞の折、民謡「篠の丸の四季」の中で「秋の紅葉は篠の丸 織るやあかねの唐錦 色とりどりにうつくしく……」と詠んだように、当時からもみじは篠の丸山麓を彩っていたようだ。その三年後、山崎出身の篤志家により楓が六五〇本、桜が二一八本など植樹され整備されて「もみじ山」を含む「篠の丸公園」の形が整ったようである。昭和五十一年には町に近い尾根山裾の「厄ヶ鼻」と呼ばれる地に展望台も建てられた。

記憶に新しいのは平成元年、竹下内閣時に「ふるさと創生一億円」事業で、山崎町が公園整備事業にその大半を拠出し、もみじ山を中心にもみじ三〇〇〇本、世界のカエデ四〇〇本を植樹したことだ。山崎高校生による育苗などの努力もあったと聞いている。公園も拡張され、この時から「篠の丸公園」から「最上山公園」と呼ばれるようになった。「一億円」事業では「もっと即効性のある事業を……」などいろいろな意見もあったようだが、こうして三〇年経った今、見事なもみじの公園に育ち関西でも有数の紅葉の名所となり毎年四〜五万人もの観光客が訪れ宍粟で一番の賑わいを見せている。

苗木で植えたもみじが見事な紅葉を見せる大樹に育つには二〇年、三〇年と長い年月がかかる。三〇数年前の当時の英断が今の宍粟の観光立市としての可能性を実感させてくれた。当時かかわった方々に感謝したい。そして今も毎年公園整備と「もみじ」の新たな植樹は進められている。おそらく二〇年、三〇年先、今回訪れた小学生たちがお父さんお母さんの歳になったころには、また一段と見事な「最上山公園もみじ山」と山崎の町の賑わいが見られるものと信じていたい。

この話を子供たちになると、児童だけでなく若い先生方にも少なからず心に響くものがあったようだ。三〇年経って花開いた私たち世代の実感が子供達や若い世代の人達と一瞬でも共感できたことを喜び、若い世代にふるさとの将来を託したいものである。

◇ 目 次 ◇

「最上山公園もみじ山」の 歴史をふりかえる	前野良造	1
農村歌舞伎	浅田耕三	2
特別寄稿	大友竹邦	6
私の記録（尺八吹いて）	柳田芳伸	9
知的情報における 陸の孤島にしてはならない	中瀬公三	12
山崎・加生・つた・いさわ冠句会	安東はつ子	13
短歌	鳥羽チエノ	15
俳句	大谷司郎	17
歌人安田青風と山崎	西嶋收一	17
十七の木々に込めたSDGsへの想い	田中涼子	18
季節を感じて	塚田清一	18
宍粟の謡曲同好会大会の歩み	衣笠詩乃	19
ちよっと深呼吸	岸脇和行	19
歳を重ねても囲碁がある	内海邦仁	20
「詩吟と出会えて」	土方研三	20
絵を描いて思うこと	野村和男	21
令和四年度の活動報告	藤永幸正	21
あたりまえの大切さ	坂東寿賀幸	22
文化祭を終えて	今藤敏葉	22
今藤会に出演して	山本修示	23
令和四年度を振り返って	内海真理子	23
三味線頑張っています！	小林由佳子	24
三年ぶりのおもてなし	尾崎正明	24
オカリナに魅せられて	伊藤和久	25
デジタル教科書	井口浩一	25
持続可能な伝統芸能の継承を目指して	長川伸介	26
川柳破丸会	伊藤次郎	27
事務局だより	大谷司郎	27
編集後記	丸井豊子	27
表紙画	山部桂翠	
挿絵	土方研三	

農村歌舞伎

浅田耕三

舞台の下手、花道の脇が小道具方の詰所である。小道具方は七人いる。四人は借物のため出払っていた。

詰所の一番奥で恭一は、細竹で組み立てた行灯に障子紙を張っていた。

「そのあんさん」

急に呼ばれて上を見ると、花道に男が立っている。四十五、六、小肥りで目の大きな、一目で役者と知れた。

「その紙箱の中に巻紙ありますかいな」

「巻紙？ちょっと待って下さいよ。ええ、あります、これ」

「硯箱は？」

「はい、硯箱。ちゃんと揃えていますけど」

「手紙書きますさかい、こっちへ貸してもらえますか」

湯のみに汲んだ水を恭一が硯に差すと、男は花道の上でごしごし墨を磨り始めた。手首も指も太く、その指先に墨をつまんで、ていねいに、というより悠揚と手を動かす。

そのおっとりとおさまった様子が、まわりの騒々しさなどどこ吹く風、と言いたげだ。

磨り終わると、おもむろに細筆に墨液を含ませ、片膝立ちで背をきちんと伸ばし左手の巻紙にさらさらとしたためた。

恭一は花道へ上がり、横から覗き込んだ。

墨継ぎ、濃淡、にじみ、かすれ、それがちゃんと按配され、一見、水茎の跡もうるわしい書翰、と見える――。

が、事實は、それは文字ではなかった。それらしく見せた線が走っているだけ。

「この要領でな、あんさん、書いてくれはりますか。巻紙一本全部。大体女の手蹟(て)に見えたらよろし」

大きな目でぎろりと恭一を見た。あわててはあと言ったが、気圧されて緊張して、声がちょっとふるえた。

恭一は紙と筆を受け取り、男はそのまま花道から外へ出ていった。

「あの役者誰や」

横でお膳の小皿や小鉢を揃えている満夫に訊いた。

「何やお前、座長の実川松延をしらんのか」

呆れた、といった顔で満夫が見る。

「へええ、そうなん。あれが実川松延。やっぱりなあ、大した貫禄や」

おおらかなその様子に恭一はつくづく感心し、さて、と吾に返って受け取った紙を見た。

書け、といわれたってこんなにさらさらと書けるものだろうか。

新聞紙に練習してみた。くねくねと線をのばしてみたが、ぼったり墨のついた、何とも野暮ったい文字、松延のとは似ても似つかぬ。

「こらあかん」

思わず口に出した。何度も練習してみる。下手に書いたら松延に恥ずかしい、と思った。仕事は山程あったけれど懸命に一時間稽古すると、少しずつわかってきた。筆に墨をたっぷりつけぬこと、筆の軸の上を軽く持って穂先だけをつかうこと。そしたら何とか似たものが、やっと書けた。

それにしても松延は、そんな要領を一言も伝授せず、よくあれで何人もの座員をひっぱっていきけるものだ、と恭一は少々腹を立てながら苦心の作を大事に巻いた。とにかく小道具方は忙しい。竹藪へ行つて定九郎の出る笹を伐つてくる、板に布を張って脇息をつくる、あれもこれもと目まぐるしく働いているうちに夜になり、客が詰めかけてきた。

幕が開いた。

芝居が始まると小道具方は閑になり、そこには二人だけ残って恭一は役替え。中座なかざになる。

中座は舞台の袖の、格子戸をはめ込んだ穴倉のような狭い場所に三人座って、観客から「花」を頂き記帳する。頂いた「花」は少しまとまると高座こうざへ持っていく。

高座は客席の入口にあって、一対半程の高さに櫓を組んだ正式の「花」の受け場所である。

中座は、弁当や毛布で両手のふさがった客が、客席へ入ってから、わざわざ高座まで行かずに「花」を寄付してくれる場所、つまり出さぬ前に酔っぱらって「花」を忘れてしまう人のないよう、知恵をしばって客席からよく見える、しかも便利な所に設けてあるのだ。

中座の恭一たちにはもう一つ仕事がある。中座と高座の連絡係二人と合わせて五人、交替で幕間に、幕のうちから観客に向かって「花」の御礼を大声張り上げて言う仕事だ。

こんな風に――。

マータマタ、クダシオカレマスルオンオハナ、

〇〇〇サマヨリクダサレマスール、

アリガトウゴザリマース、

ハナハダコウザデハゴザイマスルガハナノオンレイ

高座で受取った分ももちろん言う。そして幕の内に正座して一人がこれと言う間、他の者や舞台方で手の空いている者が、そのまわりで幕を握ってぶるぶると揺する。揺り動かして観客に注意を促すのだが、しかしお礼の口上はのべつまくなしにつづくから、観客は聴いてなどいない。食って飲んでわいわいしゃべっている。

しかし省くわけにはいかぬ。省いたりしたら酒臭い息でどなり込んでくる観客がいる。ちゃんと自分の聴いているのだ。

さて、例の手紙の出番は、最後の外題。

「祇園一力茶屋の場」

上手二階座敷、上下柴垣、手水鉢、花道に枝折門、茶屋の体――。

幕開くと千崎弥五郎、矢間重太郎、竹森喜多八、仲居等出てきて、座長扮する大星由良之助がここでは一段と映えた。

昼間、舞台を離れていても、あの華のある仕草、様子で恭一を感心させた男がきらびやかな衣裳をまとい、

「とらまえよ、とらまえよ、とらまえて酒飲ましよ」

と、目隠し姿、舞台中央で女共を追いかけるのだ。その堂々たるお大尽振りに、恭一は見とれた、中座の格子越しに。少々背は低い、口跡、顔、芸、なんと名優であろう――。

やがて悪人釜九太夫、鷺坂伴内、それにお軽が出、由良之助は一子大星力弥の届けた御台顔世の手紙を、釣り灯籠の明かりに読む。つまり恭一の労作。格子越しに息を詰めて恭一もそれに見入る。二階ではお軽が手鏡に写して読み、縁下では隠れた九太夫がそこまで垂れてきたのを読む。灯籠に映ったそれは立派に顔世御前の、優雅な筆蹟に見えた。ああ、よかった、恭一は満足し誇らしい気分になった。

昭和二十五年。今から四十余年もむかしの農村歌舞伎の話である。

その春学校を出て恭一は村へ帰り、青年団に入った。団の年間最大行事は、この歌舞伎興行であった。戦争で中止していたのが、前年から再開されていた。戦前には村人が毎晩集まって猛稽古して素人芝居をやることもあったようだが、戦後の疲弊で、村はこの頃、まだそれ程の余裕も力も暇もなかった。

呼んだのは、前年からの馴染み実川松延一座であるが、恭一がお目にかかったのはこの年が初めてである。

今は壊されて跡かたもないが、当時、恭一の村には、村のほぼ中央に立派な回り舞台があった。平屋建てだが寺の本堂より大きい、がっしりした茅葺き大屋根、床下は八人が肩を入れて回す仕掛けであった。規模は西播一といわれ、この舞台でやると芸が見映えがするので役者が一層力を入れる、と老人達は自慢していた。だから青年団への干渉もうるさく、団にとってこの興行は大変な事業であった。

公会堂や集落センターなどはない時代で、ふだんはひと気のない埃の積もった舞台に団員は夜集まって何度も打合せをした。

芝居の前日から全員仕事を休んで準備にかかる。舞台と山の中の広い空地に柱を建て、長い稲木竿を何十本も組んで高い屋根の骨組みにする。村中からシートを借り集め、たらぬ所はむしろで覆った。

けれどそんな高所で仕事ができるのはごく数人で、恭一は一度上がったみた

が、下から仰いだのとは大違いに屋根は高く、弾力のある竿は上を歩くとしなっと揺れて、足がすくんで仕事どころではない。

彼が従事したのは地上の柵席の設置である。細い青竹で仕切って、一坪いくらで客から席料をとる。一坪といっても一・二坪平方。この席料と「花」の収入から役者のギャラと諸経費を支払ったのこりが団の収入である。当時六、七万の収入だったように思う。

女子は全員役者の御飯づくり。とにかく皆一生懸命で団発行の機関誌代や他団体との交流費用などすべてこの収入でまかなうのである。

屋根も柵席もできると、夕方から翌日にかけて今度は芝居そのものの準備にかかる。恭一は小道具方に没頭した。

役者は芝居前夜から家々へ分宿した。恭一の家にも二人泊まった。役者を泊めた家は、柵を優先して買う権利がある。前の方で通路の近くが早く売れる。けれど特等席だから当然値は高い。高いが村人は喜んで買ってくれた。何しろ、年に一度の芝居である。秋祭りの神社の草相撲より獅子舞より人気があった。戦中戦後で娯楽に飢えていたのだ。

芝居は五段目「山崎街道鉄砲渡し」の場」から始まり、「二ツ玉の場」で定九郎が与市兵衛を斬って五十両を奪う頃から、客席はだんだん騒々しくなった。

芝居に酒はつきもの。柵席の真中に重箱置いて、あちこちからさかんに一杯機嫌の野次が飛ぶのである。

「しょうえんッ」

「よう、千両役者——」

そんなのはよいが、

「しっかりやれ、舞台が泣いとるぞッ」

「大き過ぎてやりにくいのか——」

こんなのは例の西播随一の自慢が肚にある。

中には舞台に尻向け、ひたすら酒をたのしんでいるやからが、大声で突拍子もない野次を飛ばす。

「あの、もうし」

舞台の上のセリフにとぼけた声で返事してどっとまわりを沸かせてみたのは

よいが、たちまちあちこちからどなりつけられる。何をッと一度は反撃するものの衆寡敵せずさすがの酔っぱらいもしゅんとなって暫くはおとなしい。

芝居は進んで六段目、座長の松延扮する勘平切腹の場。原郷右衛門、千崎弥五郎のさし出す連判状に勘平が血判する大詰めにくると、さすがに観客もひき込まれ、舞台も客席も熱気を帯びる。

そのあとが先述の七段目だ。顔世御前から由良之助への手紙の出番。前段の悲劇から一転、華やかな舞台となる。

芝居の翌朝九時に役者は帰った。

それぞれ手荷物持って、舞台の裏手のバス通り脇に勢揃いした。

青年団長が代表して礼を言う。何度も練習したらしい団長のよどみない言葉にも、風呂敷づつみをかかえた座長実川松延は、

「えろうお世話になりました」

大きく低い声でそう言っただけ。何か気の抜けたような范洋とした顔で、押し黙ってゆっくりトラックの運転台におさまった。役者達がめいめい荷台に上がり、敷いたむしろの上に坐る。

恭一は運転席を見た。真直ぐ前を向いたまま、座長は身じろぎもせず、無表情にシートに身をもたせている。

「来年また実川松延を呼ぶのやろか」

トラックの出たあと、恭一は舞台の方へ歩きながら、横にいる満夫に言った。

恭一は入団一年目だが満夫はもう四年になる。

「うん、多分そやろ。何と云うてもこのあたりでは、一番実力のある一座やさかいなあ」

「うん。あの座長はそら大したもんや。やっぱり役者やな」

「えらい気に入ったもんやなあ、恭一」

「うん。余計な事は何一つ言わんけど、他の人間とは違うやろ。顔つき、声。立居振舞いに品があるうんかなあ、あんなの。ゆったりして、いかにも役者の感じが出とる。芝居やったらああなるのやろか」

「わしはそれ程には思わんけどな」

あまり同感でもなさそうにこたえたあと満夫が訊いた。

「あの座長、ふだんは何しとるか知ってるか」

「いや、知らん」

満夫の言ったのは、恭一にとってひどく意外であった。今で言えば、廃品回収業、その頃は、たしかまだそんな言葉はなく、檻樓買ひ、と、恭一の地方では呼称していたように思う。

「ほんまか、それ」

「うん、たしかや。それもグループには属さず、たった一人で商いをやっているらしい。自由がきくのやろな、その方が」

実川松延一座は旅回りの劇団でもなく、どこかから招かれたら座員を呼び集めて上演する一座であった。

元々は旅回りだったのだろう。戦争とその後の食糧事情で芝居どころではなくなり、一定地に住みついて生業を別に持ったのだろう。

だから座員はみんな自由のきく職業だった。

恭一の家に泊まった役者は、一人は建築手伝いで、もう一人は魚の行商であった。芝居の前夜遅くまで二人に酒を振舞っていた父からそれをきいた時、芝居とはひどく縁遠い二人の仕事が恭一はおかしかったが、座長のそれを満夫からきいた時は少しもおかしくなく、なぜかかえって松延の舞台姿が一層鮮明にかんだ。

団員はまだ今日一日、たっぷりと後片付けに励まねばならない。

のろのろと客席の敷むしろをあげながら、恭一はふと思った。

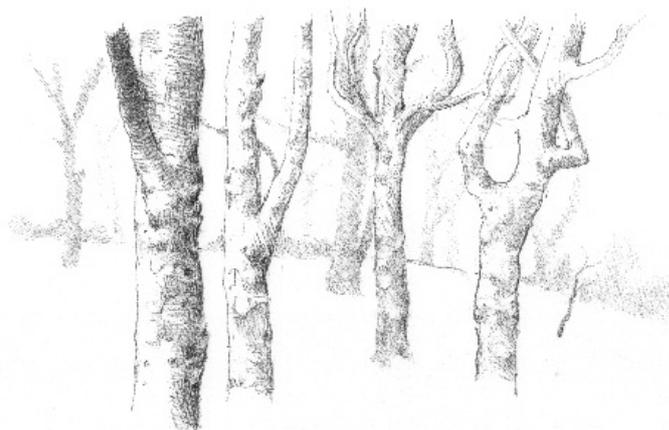
世を忍ぶ仮の姿や、檻樓買ひは――。

が、すぐにいや、と思いつ返した。

あの物腰、鷹揚さで秤片^{はかり}手に家々を回るのも、すべて芝居なのだろう、あの人物にとっては――。

その証拠――何気なしにちょっと磨ってみせた墨一つが、ちゃんとさまになつていた姿を彷彿させながら。

この小説は、一九九三年（平成五年）神戸新聞文芸・小説の部で入選し、同年六月五日の神戸新聞に掲載されたものです。著者が六十三歳当時の作品で、九十歳を超えて、今なお健在な著者の了解を得て今回紹介したものです。



特別寄稿

私の記録（尺八吹いて）

大友 美 義（竹邦 ちくほう）

（六栗市山崎町出身）

山崎の街から、伊沢川を一〇kmほど北上すると、私の生まれた葛沢『上かみの下しも』があります。都多小学校、葛沢中学校を経て、山崎高校を卒業する十八歳まで、この地で育ちました。南北に細長く、ウナギの寝床のような谷あいの集落は、まるで昔話に出てくるような風景と、文化を併せ持っていて、今の私の芯を作ってくれた大切な故郷です。

冬は雪、春は野の花に囲まれ、初夏は螢、夏は『岩上さん』の夜祭り、秋は絵にも描けないほど美しい紅葉……。

尺八との出会いは、そんな故郷を離れ、彦根の大学に入学して間もなくの事です。下宿の先輩が、尺八部の部長をしていたのがきっかけで、入部する事になります。

日本の楽器でありながら、まるで馴染みのない尺八。その音色に惹かれ、すっかり虜になってしまいました。

幼少の頃から、音楽にはとても興味を持ち、特にクラシック音楽に惹かれていました。

パーンスタインやカラヤンの指揮を見て、よく真似をしていました。ピアノを習いたったのですが、そんな環境にはなく、ただの音楽好きの少年でした。聞けば『尺八』は、専門家もある程度の年齢（十八歳〜二〇歳）から手に入る人が多い。「この楽器はまだ間に合うかも」、と思ったのを覚えています。

しかし大学を一年で退学してしまいます。将来も見えないまま彷徨している

頃、さすがのように尺八に活路を見出そうと決意して、この道に踏み出しました。

プロを目指すならプロの先生を、と大阪のプロの演奏家『池田静山』の門を叩きました。先生の公演先の楽屋に押しかけ、数時間の問答の末、尺八製管師『玉井竹仙師』を紹介され、その内弟子として生活しながら、お稽古に通う。これが私の尺八人生の始まりです。

製管師の修業は、概ね五年〜六年。ほぼ同年代の若者が五人〜六人、一つ屋根の下で寝食を共にしながら、製管に没頭する毎日です。

住み込みでの内弟子生活は、七時頃の起床から始まります。各々に割り当てられた場所の掃除。朝食を早々に済ませて仕事場に入ります。尺八制作（製管）は、先生を含め七人で、一度に五〇本〜七〇本程度で作業に入ります。それを月に二回。不慣れた新人も三か月ほどで全ての工程を把握出来ます。ただ仕上げに用いる『漆』には悩まされました。漆に弱い私は、頭のとっぺんから足の指先まで、びっしりとかぶれてしまいました。作業が終わると、それぞれに場所を見つけて、吹奏の練習です。週に一度は池田先生の稽古場に出かけ、お稽古してもらいますが、一般のお弟子さんと同じお稽古なので、専門家志望の私にはとても物足りない状況でした。そんな生活を二年ほどして、演奏家を夢見て文化の中心地東京を目指し、大阪を離れました。向こう見ずで自惚れのなせる業です。

東京では、ボーリング場に勤務しながら、NHKの『邦楽技能者育成会』を受験。専門家への登竜門です。難関の試験に受かり、かろうじて入会出来ました。だが、空気に馴染めなくて、早々に退会します。ボーリング場勤務の他にも、生活のために、芸能雑誌社、ヤマハ楽器店など、職を転々と移りました。ただ、その間も生活に流されそうな自分に、言い訳するように自主練習は欠かしませんでした。

我に返り尺八の仕事に戻したのは、二十四歳の夏です。

先ずは、何とか習得した尺八制作をして、売り歩くことから始めました。演

奏の仕事など、夢のまた夢です。ヤマハの営業で培ったセールスマンのように、自分で作った尺八を、尺八指導者の看板目指して飛び込みで売り歩きました。そのうち少しずつ売れるようになっていきました。

しかし目指すところは演奏家です。とりあえず公的な評価を得るため、NHKの『邦楽オーディション』に挑戦します。これも何とか合格して、初めてギャラを頂き、FMで放送されました。

そんな折に出会った演奏家の『堀井小二朗』師。この出会いが私の人生を大きく変えてくれました。大田区池上のご自宅で、二回〜三回明暗流の曲や先生の曲をお稽古して頂いた後『私の仕事を手伝ってくれませんか』と言われ、演奏の仕事に移行してゆく始まりになりました。

『五木ひろし』のバンドに参加し始めたのが、二十六歳の頃です。最初の仕事は『日劇』です。毎日サラリーマンのように通い詰めていました。日本各地をバンドのメンバーと一緒に旅回りもしました。五木さんとはその後六年ほどの付き合いで、ハワイでの公演が最後だったと思います。その頃は『杉良太郎』、『水前寺清子』などのバックで、演歌尽くめの生活でした。

三十六歳くらいまでそんな生活が続きましたが、本来の道、つまり伴奏ではなく器楽演奏の道に戻りたく、純邦楽の世界を中心に活動を切り替えました。箏の友人との全国ツアーをはじめ、アメリカやシンガポールなどへも演奏に出かける機会に恵まれ、やっと邦楽演奏を軸とした生活が出来るようになりました。ちょうど四十歳の時には、三十人の団体を組んで、カナダのトロント、オタワ公演に、団長として公演に出かけました。

スタジオでのレコーディング作業も活発になりました。『竹邦&憲弘』シリーズを三作、ビクターエンタテインメントからヒーリングミュージックシリーズの『Misty Lake』を担当しました。中でも私の宝物となっているのは、ジャズピアノ奏者の、デューク・ジョーダンのソングブック『I Need Your Love』の制作に演奏参加出来た事です。デュークのオリジナル曲を十四曲〜十五曲、

山中湖のスタジオで一発録り。当時はLPレコードの最後の頃でしたが、その後『徳間ジャパン』からCDで発売されています。そんな活動と並行して、演歌や詩吟の伴奏で、様々なスタジオによく通いました。演歌の伴奏仕事で一番有名になった曲は、大泉逸郎さんが歌った『孫』でしょう。

ソロでの演奏活動を続けておりましたが、四十五歳の頃『オーケストラ・アジア』に入団します。日本、中国、韓国の三国それぞれの、民族伝統楽器で形成された、九十人近い大オーケストラです。まだ日・中・韓が仲良く交流できた時代です。

日本国内では、東京を中心に、大阪、札幌、徳島など各地で公演し、また毎年のように、中国、韓国へ演奏旅行に出かけていました。韓国釜山万博、名古屋長久手の万博など、多くの催しに参加してきました。

とりわけ印象に残っているのは、韓国濟州島で行われた、日・中・韓首脳会談での演奏です。日本楽器の代表で、尺八ソロを任された事です。当時の代表は、鳩山由紀夫、胡锦涛、李明博の三名だったと思います。演奏後にそれぞれと握手を交わしました。

個人、団体の演奏活動の傍ら、五十歳の頃から、邦楽合奏団の指導を始めます。

東京練馬に、邦楽アンサンブル『来音』、新潟上越に、アンサンブル『a・游音』。ほぼ二〇年の付き合いになります。

『来音』に至っては、毎回七〇〇人〜八〇〇人の集客を誇ります。『a・游音』は、回を重ねる毎に、一〇〇人ずつの上乗せ集客。コロナ前は五〇〇人の集客がありました。(アマチュア邦楽合奏団では、異例の集客数です)

現在は、この合奏団の指導・指揮や、定期的な自主コンサート(ピアノや箏の仲間と)、様々な分野の伴奏、作曲活動、オーケストラ・アジアの活動などを行っています。

二十歳の頃から『尺八』に携わって生きてきましたが、私にとっての尺八は、

自分の中にある音楽を表現する為の一つのツールにすぎません。尺八から想像されるような歴史観や精神性もあまり深いところにはありません。尺八の持っている想像を超える表現力の豊かさ。その魅力の虜になっているだけです。

ただ音楽が好きというだけで、尺八に魅せられたというだけで、この道に入ってきたですが、こんなにもエキサイティングな人生を歩むことが出来るなんて、想像外の事です。

七十一歳を迎えた今、体力や目や演奏技術などがだいぶ衰えて参りましたが、まだ残っている熱い思いと、感性を頼りに、これからもエキサイティングな経験をして行きたいと思っています。

故郷、山崎を後にして五十年余り。何かの折にふと思い出すのは、楽しかったエピソードとともに脳裏に広がるあの蔦沢の風景です。やはり私の原点です。



略 歴

1951年5月20日山崎町上ノ下で誕生。
旧都多小学校、旧蔦沢中学校、を経て山崎高等学校を卒業。
20歳で玉井竹仙尺八工房に弟子入り。池田静山に入門。
22歳の頃NHK 邦楽技能者育成会入会。
1976年NHK邦楽オーディション合格。
同年 堀井小二朗師に師事。
1977年～1983年 五木ひろしバックバンドに参加。
1983年 青山タワーホールにてリサイタル開催。
この頃から石川憲弘と『竹邦&憲弘』コンサートシリーズを開催。
(2022年12月現在165回を数える)
1991年 東京都の助成金事業でカナダ(トロント、オタワ)公演。
45歳頃、『オーケストラ・アジア』入団。
50歳頃、『邦楽アンサンブル来音』指導、指揮。
これより少し遅れて『邦楽アンサンブルα・游音』指導、指揮。
現在 『オーケストラ・アジア』メンバー、邦楽アンサンブル『来音』
邦楽アンサンブル『α・游音』指導、指揮を務める。

【CD作品】

竹邦&憲弘	(メロディー・コーポレーション)
竹邦&憲弘II	(メロディー・コーポレーション)
四季彩	(メロディー・コーポレーション)
和楽園	(メロディー・コーポレーション)
Misty Lake	(ビクターエンタテインメント)
Duke Jordan 『Song Book』	(徳間ジャパン)
White key Black key	(3361 BLACK)
少年の日の夢	(Chikuhou Bamboo-atelier)

知的情報における陸の 孤島にしてはならない

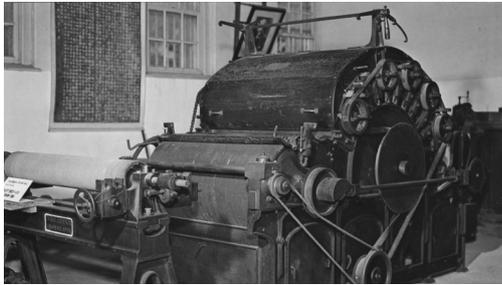
柳田 芳伸

はじめに

本誌の現編集者とは縁あって旧知である。氏はなかなかの郷土史家である。詳細な経歴は知らない。ただ、戦前の貴重な『山崎新聞』の全紙について、これをデジタル化されたこと、また『写真アルバム たつの・宍粟・太子の昭和』（樹林舎、2017年）の一編者であることは三年前に山崎に再定住してからの見聞、承知している。私がイギリスの近代史に多少の関心を抱いてきたこととどこかで重なり合っているのかもしれない。ともあれ、これだけでも、尋常ならぬ仕事である。並大抵の研鑽事ではない。成就された経験を持った人なら実感されるに違いない。そんな人から呼び声が掛った。どうであれ、背を向けるわけにいかない。そこで、肩を張らずに、思いのまま一気呵成に筆を執らせて頂くことにした。信義にもとめることはしたくない。只管、条理を欠いた駄文と墮していないかと危惧している。

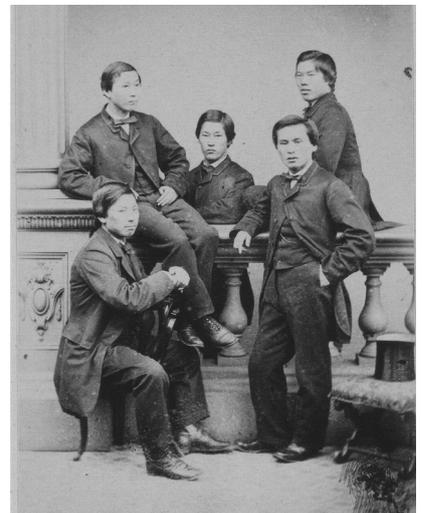
日本とイギリス

さて、唐突でやや我田引水の感は否めないけれども、イギリスと日本とは共通点がある。両国とも地球の北側にある島国で、それに大陸のどの強国からも直接的統治や支配を甘受した歴史がない。そのゆえに独自文化をも作り上げてきた。このことは決して蔑ろにできないし、してはならない。1800年前後、イギリスは自力で産業革命を成し遂げ、爾



薩摩藩が購入したイギリス製の梳綿機

来他国に無視できない衝撃を及ぼしていった。1851年の最初の万国博で展示された各種の機械や美術品を除いたとしても、保険、年金、株式（会社）、銀行、あるいは鉄道等々はすべてイギリス人の英知に負っている。日本も例に洩れずで、その影響を受けた。厳格には日英同盟からである。



イギリスへ渡航した長州藩の留学生たち

しかしそれまでもロンドンに立ち寄った岩倉具視使節団等はその凄まじいまでの様相にさぞかし目を丸くし、圧倒され、そして恐れ慄いたと推される。その末に日本はイギリスではなく、少しばかり後進であったプロイセン（ドイツ）に範をとりながら、近代化に向き合っていた。

山崎での研究の苦業

こんなことは誰でも知っている史実であり、言うに及ばない。ここで書いたのは上記のような顛末ではない。羊頭狗肉の見出しにあるように、知的情報の部面で宍粟を陸の孤島にしてはならないということである。私は三年余り前に地方の公立大学を定年退官し、こちらに戻っても、いまだ変わらず論文等を書き続けている。余程の研究好きの浮世離れた余生の選択であるのかもしれない。最初の一年目に筆にした二本分については、転居時の半年に渡る荷造り中に、必要な文献や資料を別置しておいたので、実に順調な滑り出しであった。二年目に入って、ある日突然ふっと湧いてきた一九世紀初頭における「パンと靴下」の真相の究明には、幾らか手を焼いたものの、後学の徒の助勢もあって、何とか難を免れた。並行して、無謀にもジョージ・ドライズデルの『社会科学要論』（初版1854年、底本は1890年刊28版）の抜粋訳にも着手していた。昨秋（三年目）には第一次訳と訳注作りまでに何とか漕ぎ着けた。しかし事ここに至り、はたとお手上げ（パニック）状態に陥りもした。その都度

書齋の四圍に積み上げた文献の山々から引き出してくる離れ業だけでは、もはや歯が立たなくなった。正直、行き詰った。

身近な公共図書館の一役割

ドライズデルは科学的な避妊による「予防的性交」を世に広めようとした内科医にして、かつ疎かにできない社会科学者でもある。彼自身は自由恋愛（事実婚）を重ねながらの独身族であったけれども、この著作は意外にもその時代の毅然とした売春婦たち（経済的に自立した独立不羈の精進の持ち主）からも称賛され、受け入れられた。筆が滞り始めたのは、この辺りからである。当時のロンドンや他の地には、何人ほどの売春婦がいて、どのような日々を過ごしていたのか。いつものように二、三の関連書を探し出し、一読したが、早速には確定できなかった。そこで思い出したのが、米国医学博士サンガーの訳書『萬國娼妓沿革』（明治二十三年）である。同書は在職時に「日本の古本屋」のサイトを通してたまたま目にした著である。恥ずかしながら、別な米人のマーガレット・サンガー（終戦期まで活躍した著名な産児調節家、少なくとも二度は来日している）女史の著作を検索していて、偶然逢着したものである。明治期の本であるから、当然国会図書館のデジタル版から閲覧できると思った。如何せん、宍粟市の図書館では、そうはいかなかった。版權の関係上、国会図書館と提携契約（無料）していない公共図書館では、それを見ることができなかったのである。確かに、個人的な閲覧であればやむをえない対応かもしれない。近隣の福岡町や佐用町の図書館は既に契約を交わしているのに、どうして宍粟市はそうなっていないのか。地団太を踏むばかりか、寂しく、お寒い限りであった〔追記：但し昨年五月に一般公開された〕。

知のコスモスとしての図書館

幸い、このサンガーの邦訳書は『明治期前期婦人問題重要文献Ⅱ』（湖北社、1984年）に収録されていたので、今般は事なきを得た。けれども、明治維新一五〇周年記念事業の一環で進められてきている古文獻のデジタル化事業の恩恵に預かれないという状況は愚の骨頂を飛び超え、大損失以外の何ものでも

ないと痛感させられた。これでは、前号の四一号まで連綿と発行されてきた本誌『やまさき文化』という名称が廃れよう。それにもまして、朝の散歩時に出会う明日を担ってくれるであろう小学生たちの行く末を想像すると末恐ろしくなった。流石に、こうした惨状は何とかせねばならないと実感させられた。これは次期を背負ってくれる後進たちへの務めの一つといっても過言ではなからう。

私は自ら手を挙げて何らかの役を買って出る方ではない。それでも、二度ほどは所蔵数四〇万冊程度の小さな図書館情報センターを預かった。この役目は進んで果たした。館を改修するというので、噂の佐賀の武雄図書館を始め、北九州、高松、大阪、京都、名古屋にある大学図書館を巡回したりした。ラーニング・コモンズを新設するための視察であった。分かり易くいえば、それは各々の小グループが館内の文献資料やデジタル資料を活用しつつ、ワイワイガヤガヤ（知的交流）しながらも、自発的な関心を深め、それなりの結論を導き出していくという場である。だから、騒がしく、賑やかである。静寂な図書館という印象からは程遠い。今日では、大抵の大学図書館には設置されている。懸念しているのはこの点に関わってである。つまり、宍粟の子供たちが何時の日か大学図書館や大規模図書館に足を踏み入れたとき、仰天し、戸惑いはしないか、延いては図書館そのものを煙たがってしまい、敬遠してしまわないか、とても恐れている。大袈裟にいえば、図書館は知のコスモス（小宇宙）であるべきである。入館したなら、奥へ奥へと誘われるような魅惑的な造りであるのが望ましい。そこには知りたいことや、未知が溢れ返っている。ランを介してとはなるけれども、国会図書館どころか、ケンブリッジ大学やニューヨーク公共図書館とも通信ができる。そんな知的拠点になっていくことが切望される。もちろん、読み聞かせの場があり、最新映画のDVD、人気小説、旅行書、色々な雑誌等も配架されているのも良い。けれども、宍粟ではいまや絶滅してしまった貸本屋や、各所に設けられている公民館の代替役を担うものと墮してはならない。

なるほど、日常茶飯事にあっては、手元の携帯電話からの検索で足りるはずである。そうした仕組み、仕掛けが用意されている。ゆえに、ややもすれば、

まんまとその畏にはまってしまふ。所詮、その方が楽ちんで、無難でもある。しかし実はそれはほんの入口でしかない。分らず仕舞いにしない。是が非とも知りたい、まさに執念とも呼ぶべき知的好奇心が必要なのである。昨今、円や株価の低落が云々されているが、それはただ単に日本銀行の金利政策の在り方のためだけではない。もっと深刻で、その根は想外に深い。私には、持続可能な低成長時代にあつて、どのようにして人間的進歩を遂げていくのかが試されているように思えてならない。わが国が他の国々と、とりわけアメリカ、中国、インドと比べて、ずっと遅れをとっている現況の端的な反映なのである。効率の最も良いとされる方程式を教えるだけでは、もはや到底立ち行かない。

私や、その他の宍粟市民もこの例外ではない、安閑としておれない。三宮直行便のバスができたなど何時までも悠長に嘯いているわけにはいかない。果たして、そうした絶好の機会に、一体何人の人が大型書店に、あるいは大倉山にある神戸中央図書館に足を伸ばしているだろうか。はたまた山崎町施政時代の審議録等がひっそりと眠っている県庁の資料室にまで足を運んでいるであろうや。極少であろう。ひょっとすれば、絶無かもしれない。もし心底から、宍粟の先々を本気モードで慮っておられるなら、訳無い類のほずである。流行の衣類や先端を行っているらしいその他の品々、あるいは美味なグルメについての話題は事欠かず、嫌気がさすほど耳にする。反面、知的(くれぐれも「痴的」ではない)情報に関しては、とんと耳にしない。宍粟市内にある高等学校の現在の客観的位置付けを熟知されているのだろうか。かつては野球の強豪校であったとか、多くの秀才を輩出したとか、昔語りには花を咲かせるばかりが能ではない。今後、あるいは将来の方がずっと大事なのである。しばしば、どこそこの某は××大学に入学した、○○会社に就職したなどと耳にする。それはそれで喜ばしいことではあるけれども、良き機会を得たに過ぎない。そこで如何に人間的進歩を達成されていけるのか、またその精華をどのようにして社会に還元されていけるのかが何よりも問われているように思えてならない。

温故知新に立った未来像を

このところ五輪年が連続し、サッカーのワールド・カップもあり、その時々

の成果が格好の話題としてあれこれと逐一批評される。スポーツや芸能、それらは大変魅力的であるし、多くの感動や興味を呼び起こしてくれる。それに対して、知的情報の方は即効性がなく、加えて曖昧模糊過ぎて、殆ど触れられることさえない。平素口にしようものなら、「根暗」族との烙印を押され、仲間外れに置かれてしまふ。これでは明るい未来像などありえない。未来はあるがまま(ケセラ・セラ)となつてしまふ。何もしない(自由放任)のが一番となる。多様な先賢たちが残してきてくれた知的遺産など一向に顧みられない羽目になる。

経済学で金字塔を打ち立てたA. スミスは自由主義者であつたと盛んに吹聴される。けれどもそれは正確でない。立派な統治の論理を根底に備えていた。むしろ『国富論』(1776年)の世界は道徳哲学の一特殊分野であつたという方が正しい。後輩のスミスを溺愛してやまなかつたD. ヒューム(無神論者との非難を浴びた)も、それにスミスが黙殺したとされるJ. ステュアート(英語圏で最初に大冊の全一卷である『経済の原理』(1767年)を刊行した)も高邁な人間論や政治論を有していた。彼らが偉大とされる一つは古代の哲学にまで遡り、実際に読みこなしながら、沈思黙考(スミスは散歩中、大砲の轟音に気付かなかつた)している点である。言いたいのは、イギリス人の真つ当な思想家たちのいずれもが先人たちの知恵を謙虚に吸収しながら、再考しているということである。先達が残してくれた知恵を受け継ぎながら、新たな局面に立ち向かつていくことが求められる。でなければ、野人もしくは原始人へと成り下がってしまう。それはとても文化人とは呼べない。



アダム・スミス

略 歴

- 1954年 2月山崎町に生まれる
- 1972年 3月山崎高等学校卒業
- 1981年 3月関西大学経済学研究科博士課程取得
- 2001年 10月長崎県立大学経済学部教授
- 2006年 1月経済学博士(京都大学)
- 2019年 3月退官
- 以後山崎に居住
- マルサス研究の第一人者
- 『マルサス人口論事典』他著書多数

山崎・加生・つた
いさわ冠句会

中瀬 公三

冬日和 豆選りながら日向ぼこ

山河澄む もみじが映える最上山

大谷 志路

冬日和 体やすめる窓際で

山河澄む 清流に散るもみじの葉

為国真佐行

冬日和 日射しまろやか白障子

山河澄む 落陽早く蕪ひく

中務 淑子

冬日和 身心しみる熱いお茶

山河澄む 青き地球が永遠に

内海喜代子

冬日和 外は一面綿帽子

山河澄む わが故郷に誇り持つ

実友 勉

冬日和 洗濯物でさお満席

山河澄む 山の緑がまぶしくて

東 多津子

冬日和 石段登りて汗ぬぐう

山河澄む 今日も幸せ散歩道

谷笹 まや

冬日和 来季をにらみ土起こし

山河澄む 四季が際立つ里暮らし

宇田 幸夫

道しるべ 聞かれニッコリおもてなし

山河澄む 森林セラピー我が宍粟

坂本 忠彦

道しるべ 看板頼り初道路

山河澄む 晴れた空と空気澄み

飯塚 正浩

道しるべ 経験積んだ師の教え

山河澄む 月食の夜母の星

嶋津 千里

道しるべ 先人の足跡辿りゆく

山河澄む 紅葉の山うるわしく

高井 玲依

道しるべ 父母の背をみて歩む子等

山河澄む 芽を吹く若葉霧の中

成影 廣子

道しるべ 古びた姿頼りなし

山河澄む 雑踏はなれ心地よし

西家 侑希

道しるべ 母の教えが現在にある

山河澄む 映える景色をキャンパス

に 三木ひづる

道しるべ 変わらず歩めと親心

山河澄む 神秘的な月のシヨーを見る

山口 定子

道しるべ 亡父と歩いた山の道

山河澄む 朝日を受けて東山

中瀬 公三

「第四十二回春の芸能祭」のご案内

日時 令和五年五月二十一日(日) 午前十時

場所 山崎文化会館 大ホール

主催 春の芸能祭実行委員会・(公財)宍粟市文化振興財団

後援 宍粟市山崎文化協会・宍粟市文化協会・宍粟市(予定)・

宍粟市教育委員会(予定)

宍粟市山崎文化協会会員が日頃の練習の成果を発表します。

一宮町からも賛助出演していただきます。

多くの皆様のご鑑賞とご声援をいただきますようよろしくお願いいたします。

今年度の出演予定団体をご紹介します。

□邦楽 司友会・光陽会・琴泉菖蒲会・絵夢の会・藤の会

□邦舞 春陽会・郁踊会・美藤会・むらさき会

□民謡 山崎民謡連合会

□日本舞踊 山崎日本舞踊の会

短歌

追悼

栗山節子氏を偲ぶ

安東 はつ子

令和四年一月五日、栗山節子さんが逝去されました。慎んで哀悼の意を申し上げます。顧みまして、令和三年八月十五日、コロナ禍のため歌会を休会している折、栗山さんよりお便りをいただきました。

安東さん御無沙汰をしておごめんね。心配をかけまいと思ひ黙っていましたが、実は私直腸癌で手術をして入院しています。もう私は力が尽きてしまいました。指が振えて字が書けません。判読して下さい。もう余命はなく覚悟はしています。

まさかの便りに立ち竦んでしまいました。取り敢えず御家族に電話をする。面会は出来ず手紙を書くしかありませんでした。九月六日電話あり、退院出来たといつとも変わらぬ元気な声に安堵しました。十月十七日、孫さんに連れられて私の家に見えました。すぐ歌会の友を呼び退院の喜びに話は尽きませんでした。歌会も短時間にして再会したいと。

十二月二十九日、再入院の病室より電話の声。いつもと違っていました。「逢いたい―あいたい―」と力のない全く一方通行の声が最後までなりました。今となって心残りは、コロナ禍に阻まれて面会が出来なかったのが残念でなりません。

暁闇のいつしか白き高窓に瘦せし仲秋の月が覗きぬ

秋の夜の半ば所在なく眠り午前零時より時間もて余す

気力体力癌細胞に吸ひ取られしわしわの脚撫づる真夜中

ヘルパーさんが代はる代はるに訪れて大忙しの退院一週間

何くれと気を遣ふ子ら孫に「有難う」の言葉惜しまず

身体障害者四級の手帳いただいて十一人の家族に戻る

海の町網干より農家の嫁となりし隣の恵子さんと宿命かたる

(一月号より)
水上の脚なく浮かぶしぐれ虹橋に見上げて退院したり

座布団を三つ並べれば足る縁側にころびて秋の日差しに染まる

一泊のショートケア始まりぬ先づはあいさつす認知症の女に

縫製のミシン競ひし友のゐるケア

ハウスに安らぐ初日
たった一泊ショートケアも長かりて退院の日の様にうれしき

(二月号より)

退院のよろこびが余すなく詠われている。慣れ親しんだ自分の部屋より眺める月。癌細胞に体力も気力もなくなったと受け入れて、早速に迎えるヘルパーさん。十一人の家族の誰もが色々と気を遣ってくれる。何くれと気を遣ふ子ら孫に「有難う」

の言葉惜しまずと。この一首に栗山さんの心中のすべてが表れている。四・五句に涙する。心新たに一泊のショートケアが始まる。その施設には友のいて退院をした日のようにうれしいと詠われている。

歌の仲間として栗山さんと連れだった日々は四十年余りに及びました。何でも出来る器用な人でした。自分の見た物感じた事を即具体化して作歌され、最後まで短歌と共に高齢を全うされました。共に歩んだ短歌の道、多くを教わり有り難う。安らぐにお眠りください。

(『國民文學』令和四年五月号より
転載)

栗山節子先生の御霊に捧ぐ

面やさし恩師の遺影に胸つまり無言のスマホかけてみるなり

上垣 勝子

歌の師と敬いつつに別れ路の面影つきぬ一周忌過ぐ

杉本 幹子

極寒にめげずに耐えし紅梅が立春の庭に色どりそゆる

三木 富子

亡き畏友に捧ぐ

冬帽子いいねと言へばあげるよとぬぎて賜びしが形見となりぬ

小枝

風になりし貴女が通る風の道にむすぶしろきリボン

山崎 智絵



やまさき文化大学短歌部詠草

満タンの樽の菜葉に石置けば笑顔
頭ちくる夕餉の夫

漬物にあまた挑めどわが味と誇れる
糠、粕いまだ造らず

朝霧の深き佐用路かけぬけて西へと
浮きたつ四人の媼

森元 満子
寝ながらに見し戦火をよそ事に寝ぼ
け眼で止める目覚まし

石を投げ水切り遊びし甥っ子らの姿
懐かし水溜れの池

自動車のボンネットからもくもくと
出でくる煙は一体何事

前川 有里
浅黄斑の舞ふ見むと藤袴植うるひ
とあり流行りのこの春

早世の友の遺しし薔薇の苗ふた年を
経て真っ白に咲く

庭隅の矢筈を壺に入れおはぎな
ど作ってみたくなる夕べ

竹添 和子
いつしらに桜の花の散り初めて団地
に流るるトラクターの音

秋風に薄紅色の秋桜が八十路のわれ
の胸うちを叩く

山茶花の散り敷く宿にひらひらと粉
雪舞へば上なき旅情

大部 正勝

紅葉山に登れば葉ずれの音のなか雨
傘にふわり紅葉の一葉

知らぬ間に絨毯のごとく色づきし山
間を行くここはわが故郷

骨壺は軽く乾いた音のして納骨堂に
納めし秋の日

福元千代子
空高くセピア色した沖合に墨絵のご
とく家島うかぶ

仏道の霊場たりし円教寺石中火あ
り木中花あり

新調のスーツ姿の若者がコンビニで
買いしパンとおくいお茶

中谷 賢二
たらちねの母が横たはる霊柩車今し
発ちゆく屋根に降る雪

里村の寒風のなか後ろ手の母のあと
から麦踏みしわれは

手ぬぐいを頬被りしてひょうひょう
と肥たご運びしおやぢの背中

門積 健三

一葉会詠草

難民の少年の眼差し忘れ得ず「なぜ
こんな目にあうの僕たち」

気の重き画面を消して照り若葉そよ
げる庭にのがれ来にけり

五月晴れバラの散る朝さみしかり剪
定を待つ枝の冷えおり

植木 洋子
曾孫きて夕餉の膳にむきあうに何処
の子かとぞ老い夫は言う

笑うこと忘れし夫は頭ふり今日はな
んにちと幾度も問う

和祈りてウクライナの地へ
志水 晴美

初霜の降りたる庭に水仙のつぼみ見
いでぬ師走の三日

むかご採る夫と伴いゆく道に美男葛
の赤き実の見ゆ

冴えざえと空澄みきりて寒き宵 月
欠けゆくを見守りており

武野寿々代
嫁ふたり白髪のをれを母と呼ぶこれ
から先も母でありたし

春風はダウンジャケット脱ぎなよと
おがたまの花散らして渡る

四世代つどいて餅搗き七歳の曾孫も
はちまき真顔で加わる

谷林 立身

稀れまれに咲きたる優曇華天井に父
戦死せる昭和十九年の夏

「英霊の家」となりたり母とふたり
静かに強く生きなむとせり

わが家に軍服の父の還り来つ はら
から寄りて笑顔の夢覚む

前田 幸子
「お元気ですね」声に乗りいて動き
いて老いは唐突に正面に来し

在りし日の母の育てし茶畑は四十年
すぎしも良き葉をくれる

春浅き堤をゆけば菜の花の黄にあい
にけりホッと息はく

森下 逮子
病みやすき五月と書きて日記閉ず五
月輝くとかきし日遙か

森の空あかるく大き月のぼり遠き彼
の夜の盆唄きこゆ

リラの木は立ちたるままに枯れにけ
り浅紫の花のまぼろし

山崎 智絵



俳句

山崎俳句協会

千種町方面春の吟行

四月十八日

青嶺句会 鳥羽 チエノ

満開の桜の花が迎えてくれました。私達は千種街道を北へ車を走らせました。昔一里毎に有ったと云う、下河野の一里塚、旅人が旅の無事を祈ったと伝えられております。

私達もお地藏様へ今日の吟行の無事をお祈りしました。

・柔らかなき彩り添へる山桜

美保子

・春遅き千種街道一里塚

チエノ

宍粟五十名山では海拔一〇〇〇以上の山々が連なる千種は左に後山、笛石山、右に植松山、大馬鹿門で有名な空山を見て通り過ぎます。まだ芽吹き始めたばかりの山に山桜が美しい。

・久方の故郷懐かし遅桜

ゆき



緑山

・三楹の群れたる谷やたぬき出る

幸子

千種高原スキー場は人の気配も無く広々として、春の気配を漂わせています。有名なラドン水で口を漱ぐ。

・ラドン水幾千年の春くぐり

とみ子

・春の山久しぶり飛ぶとんび見る

久子

・残雪の中に彩り添へる山

良子

旅館にて早春の御馳走に舌鼓。大きな石庭作りの池には沢山の緋鯉、真鯉がゆったりと群れを成していました。

・湧き水の豊かに緋鯉悠然と

緑山

句会にはぎやかに盛り上がり千種の美しい景色と美味しい空気を満喫。

コロナ禍のなか案じていた吟行も無事に終了、楽しい一時を過ごせたことに感謝し帰路につきました。

当日欠席の者の俳句

・花吹雪浴びる老犬目瞑りて

駆雲

故 和田疎人先生秀句

・おでん屋を肩組み出でて相識らず

・熱燗や昨日は過去と忘るべく

・熱燗や十とせの隔てすぐに消え

青嶺句会詠草

・倅せや新酒を酌んで歌うとき

・引きおろす梢にありし烏瓜

門積 緑山

・家族みな健やかなれと初日記

・一両の電車呑み込み山笑ふ

杉山美保子

・咲き満ちる萩を散らして今朝の雨

・高窓に杜氏の声洩れ今年酒

鳥羽チエノ

・古民家を今はカフェに花の屋

・第九の歓喜つつみて帰路小春

田中 良子

・足慣らし紅葉の道を散歩する

・破れ扉のぞいた空き地に鳳仙花

島本 久子

・土産にと新酒銘柄読みあげて

・古民家の雛壇ゆかしうす灯り

中尾とみ子

・身の丈に生き風まかせ吾亦紅

・水澄むやせせらぎの音心地よき

三浦 ゆき

・旅立つ孫ハイタッチして春の道

・夕野分杜の大樹のうねりきく

若松 幸子

・笛乱調獅子狂い舞う秋祭り

・裏山の柿熟るるまま落つるまま

原田 駆雲

山脈句会詠草

・柿むくや使ひ慣れたる古包丁

・小菊咲く籬のつつむ山の家

京屋 伊助

・軽鴨の子や笑まし列往く青信号

・寒垢離や気魄で唱ふ般若経

重田 陽子

・空洞の老幹強し柿若葉

・食初の曾孫囲みて秋の宴

谷口 昭子

・涅槃絵をかかげ古刹のにぎわいぬ

・余生なほ輝く日々を雪蛩

鳥羽チエノ

・仰臥の窓雲のなほ上絹の雲
・息するもの月光あびて今寝入る

西田 宣子

・秋草のゆれて我呼ぶ散歩道
・稜線の色刻々と秋深し

三浦 ゆき

・黄昏や色なき風のとほりゆく
・夜来雨あがりて月のうるはしく

高井 麗子

・聞き流すことも身につき春灯し
・手に残る移り香かすかさくら餅

岡田 福代

・やさしさは伝染するよ蜜柑の香
・白紫陽花活けてひととき無私にな

澤田 豊子

・高原の風を集めて花芒
・鳥語ふり風の溪谷初紅葉

古谷 晃子

・人の居ぬ能舞台に落葉舞う
・今年また畑の柿供え糸瓜忌

清水 省三

五色俳句会詠草

「五色の春秋」

・三径の芽吹き初めたる宿明り
・水温む鯉もゆるりと目覚めをり

中田 文子

・雑念を空に消しゆく春の月
・囀りや円空仏のまなざしに

中澤 一紅

・神木の樹齡千年百千鳥
・水音のほかは静寂座禪草

冨井 幸子

・ひたすらに青空目指す桐の花
・境内の丸池ふさぐ花筏

角野 慶子

・ひらめける時放足れり翡翠の矢
・青鷺や塑像のごとく杭の上

重田 陽子

・山寺の夕餉は早し夏の月
・湖見ゆる伊吹山頂夏の月

角野桂治郎

・野良仕事野良にかんざし彼岸花
・烏瓜農道輝くペンダント

野本 夏遊

・冬日和川辺の靄に立ち尽くす
・縁側で駒の音する冬日和

笠原 了

・杖音の静かに響く秋の暮
・櫓田や過疎の野面に夕陽映え

福元 敦子

やまさき都句会詠草

・抱かれる犬もはしゃぎぬ今朝の雪
・魂の音なき風の秋思かな

是兼 妙子

・風鈴の音色に憩ふ老ホーム
・夏布団足で弄る夜明け前

坂井 恵子

・芒原穂先を渡る夕日かな
・触れ合うてこそ伝わるよ指相撲

坂井 久栄

・空うつす水面に揺れる紅葉かな
・春光の波打つことの棚田かな

速水美知代

しろう笹ゆり句会詠草

・眈眈と聖菓カットに子の目線
・コンバインひとりの圃場音暮るる

重田 陽子

・夕日受く風と遊ぶや庭すすき
・転びてもよくぞ我が骨秋の暮

谷口 昭子

・綿虫のふわりと胸に頭上へと
・土掘れば冬眠蛙よたよたと

田村 富美

・出会い別れ出会い別れて冬銀河
・我が過去の道振り返る師走かな

矢野登次郎

やまさき文化大学俳句部詠草

・柿をもぐ子等の笑顔や空に咲く
・今朝の秋行きつもどおりつする温度

金山 英子

・冬晴の港の静寂小舟浮く
・柚子風呂や不眠の魔除けベルの音

坂井 恵子

・木洩日の光鮮やか冬紅葉
・歩かねば錆びる心身寒の入

坂井 久栄

・冷やかや砥石に鎌の刃を当てる
・枝豆と大ジョッキと笑ひ声

里見 和樽

・陽の落ちて寂しく聞こゆ鹿の声
・音もなく野良仕事背に秋雨来る

清水 省三

・長き夜や手に歎異抄ひとときぬ
・芋の秋自家菜園の混ぜ御飯

高井 智代

・春日や吉報届くバイク音
・静けさや闇夜の森の鹿の声

萩原 恵子

・野分くる竹のうねりと風の音
・早朝の静寂の中に冬の音

藤野 直子

・冬紅葉官兵衛自慢のわが城下
・八十路越し一歩歩みの春を待つ

平形 照美

・野地蔵に止まる冬蝶郷の昼
・正面に冬枯れの山無人駅

宗平 圭司

■ 歌人安田青風と山崎

山崎郷土研究会

大谷 司 郎

安田青風(本名・喜一郎)は明治二十八年(一九〇五)揖東郡石海村(現揖保郡太子町)で生まれた。姫路師範学校を卒業して、教員となり、大正十四年(一九二五)山崎高等女学校へ赴任してきた。

青風は若くして詩文に優れた才能を発揮し、特に短歌の研究と作歌に傾注した。山崎在住の十二年間には山崎高女に「草の実空」を結成し『くさのみ』詠草集を出すなど、校内での短歌熱を高めるとともに、町内の同好者に呼びかけ水甕山崎支社をつくり歌集『春鳥』の発行、昭和四年(一九二九)には水甕社兵庫県大会を山崎で開催している。また当地の歌壇をまとめた「山崎歌話会」を創め歌集『香魚集』を発行する等、山崎の地に短歌の一大隆盛期を築いた第一人者である。

青風の住まいは東鹿沢にあり、そこを竹林荘と名付けて『竹林荘通信』を発行している。山崎を去る一年前、青風の初老を記念し『菖蒲湯』を妻

佐和乃を中心に門人たちで作っている。当時は山崎歌壇の最も華やかな時期で「山崎へ入ると歌の匂いがする」とまで言われた。

また青風はわが郷土研究会の前身である宍粟郷土研究会の幹事として会報『しゝさは』の編輯にあたり、第七輯まで発行を続けた。宍粟の地名の起源について播磨国風土記などを引用しつつ解説するなど郷土史にも造詣が深いことが読み取れる。

同時期に地元歌壇の取りまとめ役をしていたのが安井俊二(門前)で、山崎歌話会の設立に当たった中心人物である。同会員の発行する歌集に



安田青風家族写真右端が青風『菖蒲湯』より

は青風か安井俊二の名がよく出ている。この両氏はどちらも短歌だけでなく郷土史研究にも取り組み、『しゝさは』の発行は二人の協力があってこそ成ったものである。

奇しくも姫路文学館では本年一月から三月までの期間、青風の没後四〇年記念の企画展として「歌人安田青風展」を実施している。八十七歳で没する歌人人生の中で、山崎での十二年間は青風にとっても最も華やいだ頃ではなかったかと思われるのではない。

十七の木々に込めた SDGsへの想い

新潮会 会長

西嶋 收 一

新潮会は、令和四年に創立七十周年記念事業を行いました。社会貢献活動として、今話題となっている、そしてこれから誰もが取り組まなければならぬSDGsの十七の目標を十七本の木々に表すことによって、持続可能な開発目標に向かって進むとの思いで宍粟市に土地を提供して

いただき、SDGsの広場を建設いたしました。

おりしも、現在、宍粟市ではSDGsの「優先的取り組みとしての木育」の推進を行ってまいります中でもあり、新潮会の願いを快く受け入れていただきました。

そして、今後新潮会としては、会員の意識向上のため、毎月行う例会でSDGsバッジの着用や本広場へ持続的に関与すること、できることできそうなどところから取り組むことによって、宍粟市が目指している「木育」の観点より少しでも、森を育て、木を育てることによって、郷土愛の醸成、宍粟市への愛着に寄与できるよう取り組んでいきたいと思っています。

文化協会様には、今後とも新潮会の活動にご支援とご指導の程よろしくお願いいたします。



季節を感じて

宍粟茶華道協会

田中涼子

茶道と華道をしているおかげでいつも季節を感じながら生活出来ます。

お茶のお稽古では一箇月ほどしか使わない茶碗を選び出し入れし、風炉の季節のお点前・炉の季節のお点前のお道具をその時期その時期のものを出し、お軸を選び、書かれています。通りの季節だなーと感じ、猛暑のころ、洗い茶巾のお点前でもっと涼しそうな水の出せないかな？大寒のころ筒茶碗で頂くと指先まで温かさを感じるなー。

また風炉の季節には早朝から蚊と戦いながら雑草を取り、茶花が消えないよう汗水流し、やっと咲いた草花を取り合わせ生けて涼しさを感じ、炉の季節にはその時期その時期の椿や花木が咲くよう霜や寒さに痛まないようつぼみを見つけ屋内で膨らませるため庭を駆けずり回ってやっと床に生け、こんなに寒いのによく咲いたねとほっこり……。

玄關のお花も出来るだけ家の庭木や花を生けて、庭でうっそうと咲いている花木でも、生け花にするところなんにも趣ある花に変わるんだと……。家に来られた方も花屋さんで買った花より家の庭の花で生けていた方が喜ばれます。

庭の花が消えてしまったり、枯れてしまったりしながらも、一年中何とか季節季節に咲く花を楽しみ暮らしています。

宍粟の謡曲同好会 大会の歩み

宍粟謡曲同好会 山崎集彬会

塚田清一

宍粟の謡曲同好会大会は、四十二年前の昭和五十六年三月に波賀町民センターホールに於いて、参加者一〇九名で「宍粟郡謡曲同好会大会」としてスタートしました。そして第二回大会は、山崎農協ホールで、実に一六一名の参加者で開催され、この年がこれまで最多の参加者を数えています。その後、回を重ねてこの三月の大会で通算四十二回を迎えることとなりました。また、平成十八

年の大会からは名称を「宍粟市謡曲同好会」と改めて第一回（二十六回）として行われ、今日に至っています。

そこで、この間における参加社数と会員数の動向を過去の資料を参考にして記してみたいと思います。

まず社中数ですが当初一〇社中です。スタートしましたが、昭和六十年から六十一年にかけて二社中減の八社中になり、途中社中の分割はあったものの平成二十六年までは、ほぼこの状態で推移していました。ところが平成二十七年から二十八年にかけて五社中に激減し、現在に至っております。一方参加会員数は、第二回から一〇年単位で見えますと、平成五年が八十二名、十五年は六十一名、二十五年に四十六名、令和三年には三十名と社中数の減少と同様に激減しております。

四十年を超える歳月の間に、ご指導いただいた先生方や会員の多くが鬼籍に入られ、あるいは高齢化や退会等でその原因ははっきりとしていないと、今はこの現実を受け入れざるを得ないと同時に、かつて各社中をご指導いただいた今は亡き池田大典氏、横尾昇氏、秋田利市氏、内山正作氏、山崎石男氏、宇田渡氏

等の諸先生方の遺志を継いで、現在五社中で何とか大会を構成しているところです。

一昨年の令和三年は、折からのコロナ禍のために開催を見送りましたが、翌四年からはコロナ対策に十分配慮をしながら開催し、今年も三月十二日に大会を開催します。今後この大会を可能な限り末永く継続していけるように、参加会員全員が研鑽を積んで頑張っているところです。どうか、宍粟市内外の多くの方々のご理解をいただくとともに、参加を希望される方はご遠慮なく声をおかけいただきたいと思います。



ちよつと深呼吸

宍粟市少年少女合唱団

衣笠詩乃

「青空しんこきゅう」という曲を知っていますか。フックブックローという音楽と人形劇の子ども向け教育番組のオープニング曲です。十年以上前の番組で、当時私は小学生でした。観ていた当時は何気なく歌っていたこの曲ですが、今になって改めて聴くと愛に満ちた優しい歌詞の深さに気づき、震えるほど感動しました。幸せは追いかけるのではなく追いついてくるものだ、ちよつと深呼吸して休んでも良いんだよ、と優しく語りかけてくれます。他にも何気ない日常の小さな幸せを喜ぶ曲や、子どもの頃に思いを馳せる曲等、大人に聴いてほしい曲が沢山あります。子ども向けの音楽や絵本は、思わぬ新しい発見をもたらしてくれます。案外子どもの方が大切なものを知っていて、教えられるのは大人の方です。でも、もしかしたら私達は忘れていただけなのかもしれません。日々を精一杯生きて行く内に、大切なものを手放してしまっているのかもし

れません。フックブックローは私にそれを気づかせてくれました。

昔ながらの日本の風景の美しさや懐かしさを想起させる童謡や唱歌、歌と共に生きる喜びを綴った合唱曲、現代に生きる人々の傷に寄り添い代弁してくれるポピュラー音楽。時代の流れと共に多種多様な音楽が生まれ出されてきましたが、どれも人の繋がりがあからこそ多くの人の心に届いたものです。今、そんな人と人の繋がりがマスクで隔てられ、世界では国同士が争っています。

気が滅入るようなニュースにやるせなさを感じ、どうにも出来ないまま、せわしない日々を送っている人が沢山いると思います。苦しんでいる人達に思いを馳せることも大切です。しかしまずは自分自身を救ってあげることも必要だと私は思います。好きな音楽を聴いて、好きな人と会って、時には絵本なんかを読んでみてください。ちよつと深呼吸してみると、景色が変わるかもしれません。それから誰かのことを想っても遅くありません。

歳を重ねても

囲碁がある

山崎囲碁同好会

岸脇 和行

「囲碁」の別称には様々な表現があるが中国の故事に由来するものが多い。その別称の代表格とされるものに「爛柯」という言葉があり、これも中国から伝わった。その伝記は次のようなものである。

その昔、晋の時代に木こりの王質が、四人の童子たちが碁を打っているのを見て時がたつのを忘れ、童子に言われて斧を見るとその柄(柯)が朽(爛)ちていることに気がついたという話である。この爛柯の故事は囲碁に没入して時のたつのを忘れることを斧の柄が腐るというあり得ないような例え話で象徴的に表しているわけだ。

別称にはその他にも方円、忘憂、烏鷺、座隠、手談などあるわけだが、なかでも忘憂は日常のわずらわしさからしばし自分を解放してくれそうな意味あいを感じられ好感が持てる。だから対局が始まるときに「忘憂、

忘憂」と二、三回呪文のように唱えてやると肩の力が抜けてすっきりした碁が打てるかもしれない。

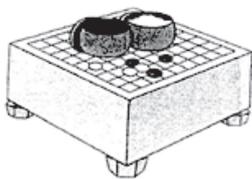
話は変わるが、私は昨年暮れに広島は福山の鞆の浦にある福禅寺へお参りしてきた。ここにある対潮楼でかつて日韓囲碁対局が行われたと聞いて興味をもって見てまわったが、確かに対局している写真が掲示してあり印象深いものだった。

広島といえば尾道市の因島は、碁聖といわれた本因坊秀策の生誕の地である。幕末に活躍した秀策は近代布石の基礎を築き天才棋士と呼ばれた人物であった。

さて、私も歳を重ねて老境に入りつつあり碁に限らず記憶も曖昧になりがちなの頃だが、碁に励むことによって少しでも老化にブレーキをかけたいと願っている。ただそのための環境作りは有難いことに筋道がよく整っているのだ。いつもお世話になっている碁席のオーナーは誠にしっかりした方であり、居心地の良い碁席の提供はもちろんのこと碁を打つための基本的な礼儀、心得などを碁はここから始まるものだとプリントで文章にして教えてくださる。

碁というゲームは陣地を取り合うという数字との戦いであるから脳の活性化に役立つわけで、そこに碁を打つ有難さと幸せがある。

*囲碁川柳をひとつ
格言を駆使してみたが碁は勝てず



「詩吟と出会えて」

山崎詩舞道連盟

吟道賀堂流

北辰吟詠会最上支部

内海邦仁

近所の親しい方から詩吟教室を見学してみたいかと誘われたのは五年前でした。歌うことが好きな私は、軽い気持ちで参加したのですが先輩方が信じられないような大きな声で吟じられているのを聞いて驚いたことを覚えています。

先輩方は腹式呼吸で発声しておられ大きな声を出すことで健康維持にも繋がっていると言われています。

私も教室に通いはじめて仕事で疲れている時でも吟じること不思議と疲れが取れて「スッキリ」するの
で、最近ではよいストレス解消にもなっています。

また、年間に昇格試験、競吟大会、吟士権大会等があり、詩吟を通して良い御縁、出会いもあります。

これからも「継続は力なり」で末永く続けていきたいと思っています。皆さんも健康の為に詩吟を始めてみてはいかがでしょうか。



絵を描いて思うこと

宍粟美術協会 副会長

土方研三

家の周りをぶらついていると何か木々の隙間で動くものに気がついた。いつも見慣れた場所なのだが、じっとしているとイタチがこちらを向いて鼻をくくんくしている。どうも目より鼻と耳に頼っているようだ。こんなのが居たのかと動かずに耐えているとゴソゴソと何か探しているようだ。十五分程も過ぎたと思うがその草の一つ一つが今までにない大発見であった。蟹でも捜してだろうがイタチの目的は解らないまま草むらに消えて行った。が、さらにその草むらに小さな花が咲いている。見たことはあったが名前も知らない。スマホで調べると「溝蕎麦」とあった。二つとも新しい発見ができた嬉しくなった。そんな経験をしてからは「よく見る」「何度も見る」「調べると様々な事に出会いが増えて周りの何気ない風景がとて新鮮に思えてきます。

絵がうまく描けず何をどう描くか

悩んでいたが題材は身近に溢れていた。自然だけでなく人の生活の中でも少し見方を意識すれば気付く事や、発見は続々と現れます。大げさですがどんな人でも芸術家でも、まずは一個の人間であり、自然と社会の中で生きている事を意識すべきであり、文化人ともなればそれぞれの目標と努力の中に深い観察力と広い視野を持てるようになってほしいと思う。

さらに誰もが思うことだが描いていく作品には見る人が何か感じられたり、発見できる様な作品になるように努力したい。

美術協会の会員や関わりのあるすべての人に感謝すると同時に宍粟の中には個々で創作されている人が多し。そんな人達にも美術協会を通じてもっとめぐり会え、お互いが精進できる場所となるよう願っている。



令和四年度の 活動報告

昭和会
野村和男

昭和会は講師を招いての月例会を中心に、音楽鑑賞の家族例会、年一度の会員旅行、新年会や忘年会を実施しておりました。

会員の親睦と文化・教養が少しでも高められたらと毎月例会を行っていましたが、高齢者が多いため数年前から例会の時間も昼間に変更いたしました。

また、コロナ禍で令和四年度は総会を始め例会の中止が続きました。しかし春になり行動制限が緩和され、五月に久しぶりの例会「食事しながらの懇談会」を伊沢の里で実施し、全員参加で大いに盛り上がりました。

六月には三年ぶりの会員旅行を実施しました。コロナ禍でもあるので旅行先は県内です。灘の酒蔵「酒心館」、蔵の料亭「さかばやし」でノーベル賞公式行事提供酒「福寿 純米吟醸」を飲みながらの昼食。

さき酒コーナーで色んな酒を試飲、でも大吟醸の試飲がない。有料で良いからさき酒させてと粘るが駄目だった。味も分からぬまま買うのは不本意だったが妻の喜ぶ顔が目には浮かび大吟醸を土産に買ってしまった。

次に新開地の『喜楽館』で上方落語を鑑賞する。終演後、喜楽館のご厚意で舞台をバックに記念撮影。

神戸ポートピアホテルで宿泊し、翌日は阪神タイガースが毎年優勝祈願する廣田神社を参拝し祈禱を受ける。思っていたより立派な神社だったのでちょっとビックリ。

そして甲子園球場に隣接する甲子園歴史館を見学。

県内の近場の旅行だったが、結構楽しめました。ただ会員のお酒の飲む量が以前に比べると激減しているのに驚きました。健康志向なのか、お年頃なのでしょうか？ 会計担当者としては助かりますが……。

七月例会では介護保険制度、十月月末に忘年例会を実施しました。

令和四年度はコロナ禍で十分な活動は出来なかったが、令和五年度にはコロナが落ち着き従来と同じように年間を通じて活動が出来ればと願っています。

あたりまえの大切さ

宍粟和太鼓アーツ倶楽部

藤永幸正

宍粟和太鼓アーツ倶楽部は、日本の伝統文化である和太鼓と篠笛の団体です。和太鼓は、これまで七団体と篠笛教室があり、会員数も百名を超えておりました。地域でも演奏をさせていただくことも多く、毎年開催しておりました「宍粟和太鼓フェスティバル」にも、たくさんの方々にご来場いただき、第十四回まで続けてこられた歴史があります。

しかし、コロナ感染拡大に伴い練習そのものができず、発表の場が激減したこともあり、いったんこの活動が閉鎖になった時期がありました。私自身もこの時はモチベーションも下がってしまい、続けるべきかどうか悩んだことを思い出します。というのもこれまで、指導が受けられ、太鼓や練習の場があり発表の場があるのがあたりまえの生活でした。それがコロナによって一転し、

さまざまな制限を受け考えさせられる毎日が続いたからです。

そのあたりまえがいかに大切だったか気づかされました。悩みながらも少しずつ活動を再開していくうちに、自分自身も「やらなアカン、やっぱり続けたい」という気持ちが出た。今では原点に返ることの大切さや、この和太鼓と向き合えることに素直に感謝できるようになりました。

アーツ倶楽部としても、各団体が自主練習を再開し、メンバー間でそれぞれ工夫し合い継続できています。ようやく皆さまへの発表の場が近づいてきました。今年度二月に「和太鼓と篠笛のつどい」と称し、文化会館にて開催いたします。不安な点はもちろんありますが、これまでの思いを込め、参加者全員が一丸となって演奏したいと思えます。皆さま今後とも宍粟和太鼓アーツ倶楽部をよろしく願います。



文化祭を終えて

山崎日本舞踊の会

岸本幸子こと

坂東 寿賀幸

五月十五日の春の芸能祭、そして十一月三日の秋のふれあい文化祭が、コロナ禍の中で三年ぶりに開催され、無事終わったことに、安堵いたしました。ありがとうございます。これまで、関係者や係の方々が開催に向けてご尽力いただいた賜物であると感謝の気持ちでいっぱいです。

春の芸能祭は、出演できたこととうれしさはありましたが、客席にお客さんの姿はなかったことで、やはり何か物足りない感じがして寂しく、満足感は少なかつたように思います。秋のふれあい文化祭は、お客さんに入っていたら、午前と午後の二部制の休憩時間に、客席や楽屋の消毒など係の方の陰の努力がありました。その後の舞台は、暗転からパッとライトが当たり、客席からお客さんの拍手が始まる。何と気持ちのよかったこと。気分が高まって気持ちも入り、とても楽しく踊らせてい

たきました。

今回のコロナ禍での芸能祭や文化祭で、お客さんに観ていただくことの大切さを身にしみて感じました。以前のように客席はいっぱいにはなりません。「お客さんを育てるのも、演者の役目」と師匠に教わりました。たくさんのお客さんに入っていたら、満足して観ていただくためには、もっともっと精進して上手にならなくてはと思いました。十一月より仲間が二人増えたので、楽しみながらさらなる高みを目指してお稽古に励みたいと思います。



今藤会に出演して

山崎邦楽の会

長唄三味線 藤の会

中井妙子こと

今藤 敏葉

昨年十一月、京都で開催された今藤会に三年ぶりに出演させてもらいました。今藤会というのは今藤流の関西での演奏会のことです。出演といってもほとんどが名だたるプロの演奏家で私は最初の合奏の端で弾いただけです。前列にはラジオの長唄の時間でよく耳にする方々がおられ、ちょっとでも狂った音を出してはいけないと緊張の連続でした。でもプロの演奏家のリハや本番を間近で見聞きできるのは感動でした。

その舞台の中でもひととき華やかなのが京都五花街の一つ宮川町の芸妓さんたちの演奏で、客席にはお姉さんを応援する舞妓さんの姿も多くそれも華やかさを増しています。五花街では踊りは〇〇流、長唄は〇〇流と決まっています、宮川町の長唄は今藤流になっています。

コロナ前に舞妓さんのお稽古場で見たスケジュール表には日本舞踊、

三味線、唄、お囃子、茶道、英会話までびっしりと組まれていました。そこには日本の伝統芸能や文化が確実に伝えられていることを実感しました。

さて、歳を重ねてからそうした伝統芸能の一つ長唄三味線の魅力にはまっている私ですが、色々な舞台で刺激を受け気持ちだけは向上心に燃えています。一人でも仲間が増え一緒に弾けたらと願っています。

私の師匠は大阪在住の今藤佐敏郎という歌舞伎などで活躍されている三味線方です。一人ライブで山崎にも来て頂いている杵屋邦寿師匠、山崎出身の今藤佐知保師匠からもいつも刺激と感動をもらっています。

高齢化の波が押し寄せどこまで続くかわかりませんが、そうした師匠たちとの出会いに感謝しつつ精進してまいりたいと思います。



令和四年度を 振り返って

宍粟市吹奏楽団 団長

山本 修 示

今年度は、私たち宍粟市吹奏楽団にとって思い出深い年となりました。平成二十三年八月に発足した当団にとって今年度は十周年を迎える年であり、後援会の方々とともに十周年記念事業実行委員会を組織して、様々な事業を行ってきました。

一つ目は、ゲストを招聘するなどレベルの高い演奏会を開催する。二つ目は、演奏会前に記念式典を開催し、今までお世話になった方々に感謝の気持ちを伝える場を設ける。三つ目は、育成事業として市内中学校、高等学校の吹奏楽部員を対象に楽器講習会を開催もしくは支援し、市内中高生の技術向上並びに団員との交流を図る。四つ目は、それらの事業を行うため寄付を募り、それで得たお金で楽器を購入させていただくなどです。

記念演奏会は、六月三日に第十回定期演奏会として、オオサカ・シオ

ン・ウィンド・オーケストラのサクソ奏者田端直美さんを招聘し、開催することができました。田端さんの素晴らしい演奏に観客はもちろん団員たちも大変感銘を受け、今後の活動のエネルギーを得ることができました。また、記念式典も演奏会前に開催し、団の発足時から大変お世話になった方々に感謝の言葉を伝えるとともに記念品を贈呈することができました。そして、いただいた寄付金で購入させていただいたティンパニを披露することができました。

さらに、演奏会前日に支援事業として田端さんのサクスクリニックを開催したり、十一月九日に宍粟市文化振興財団と共催で、多数の講師の方々を招聘しての管楽器・打楽器合同講習会を山崎西中学校で開催したりすることができました。その他、十二月四日には千種小学校体育館で三年ぶりにしろうファミリコンサーとも開催することができ、本当に充実した一年を過ごすことができました。

来年度からはまた気持ちを新たに頑張っていきたいと思っています。

どうぞこれからも宍粟市吹奏楽団をよろしく願います。

三味線頑張っています！

山崎民謡連合会

内海 真理子

六十歳になり仕事を卒業しました。さあこれから毎日自由だ！と思った矢先、新型コロナで全停止の日々となりました。これといった趣味もなく引き籠りの毎日、さてこれからどうしよう、このまま認知になってしまいかもと、ボンヤリしておりました。そんな時、天罰が当たったのでしょ、自宅で転倒、腕と肋骨を骨折してしまいました。病院で旧知のNさん（看護師さんです）と再会し、「リハビリ兼ねて三味線してみない？」と勧めていただきました。天から降ってきたようなお誘いに、おっかなびっくり、やってみようかな、と思ったのが石田陽子先生との出会いです。

三年前の暑い七月の事でした。始めは先生との個人レッスン、初めて触る三味線は、とても重く、指は動かない、バチの持ち方はぎこちない、手首が硬くて振れない、先生に叱られるばなし、こんなに叱られるのは

小学校以来かも、私凄く不器用やつたんや、と情けなく焦りまくり、顔から汗がポタポタ落ちて、まるで泣いているみたい、叱られて泣いてると先生に思われてるかも、恥ずかしい、と思ったら更に汗は止まらず学生の頃に戻ったみたいに必死でお稽古した毎日でした。でもそれが楽しくて、ほんの少し弾けただけでも凄く嬉しく思いました。先生からのお許しが出て、先輩方と一緒に弾けるようになった時の嬉しかったこと！

三味線を弾くためには民謡を知らないダメと先生が言われ、民謡教室にも参加することになりました。

民謡は未知の世界、先生はじめ諸先輩方の美声に圧倒されつつ聞いておりましたが「貴方も歌うのよ」と言われ、内心無理無理無理と冷汗掻きつつ参加しております。

三味線を習い始めて二年半余り先生や諸先輩のご指導のおかげで、発表会、アクリエ姫路、山崎文化会館などのステージに皆様と共に上がる事が出来ました。

職場と家との往復しかなかった私が、新しいお仲間が出来、こんな楽しい経験が出来るとは！

まだまだ拙い弾き手です。今日も

先生に叱られながら、お稽古しております。もっと上手になりたいな、と思って励んでいる毎日です。

三年ぶりの おもてなし

山崎手作り甲冑の会代表
小林 由佳子

今秋、三年ぶりに「最上山もみじ祭り」が開催の運びとなりました。私達の団体も「もみじ祭り実行委員会」のメンバーとして開催の在り方など意見も出してきましたが、コロナが収束したわけでないという事から、全体イベントは開催せず、各団体が自主的に行うという結論に至りました。

十一月十九・二十日の二日間は、手作り甲冑を着用した武者を中心にもみじ山へ出陣、多くの来客者とふれあい、記念写真の撮影にと、久しぶりに「手作り甲冑の会」として充実した時を過ごしました。また、会場近くに手作り甲冑を展示、子どもさんには甲冑の着付けなどを行い大変好評を得ました。久しぶりのイベ



ントでしたが、会員一同心地よい疲れを感じながらも楽しく過ごせました。

本来の目的である手作り甲冑を通して地元の歴史を伝える事も出来、山崎の魅力発信にも寄与できたと思っています。来年こそ会場傍で、おもてなしが出来ることを切に願っています。

十一月十二日には神野小学校運動会にも甲冑と着付けの協力をさせていただくなど、市内外の団体とも連携した活動を続けていきたいと願っております。

引き続きよろしく願います。

オカリナに魅せられて

森の国オカリナフレンズ小鳩

尾崎 正明

ふとしたことから、東京の国立音楽大学フルート科を卒業されオカリナもされていた稲葉先生を迎えてオカリナの教室が始まりました。オカリナは土を八百〜千二百度で焼いた陶器の楽器ですが素材が木とか金属ではなく土の響きは独特のやさしさがあり、それで創るハーモニーは心に沁みるものがあります。でも最初は指の腹で穴をふさぐ為なかなか正しい音程を出すのがむずかしく厄介な楽器です。しかし吹き込んでいくと、滑らかな音色がでるようになりやがて虜になります。

オカリナ教室からスタートした「オカリナフレンズ小鳩」は一斉奏から始まり、やがてアンサンブルも楽しむグループになってきました。地区で行われる文化祭や敬老会、ふれあい喫茶などに出演する楽しみに味をしめ活動に熱が入ってきました。また、日本で最大規模の二日にわたる「神戸オカリナフェスティバル」

に一泊二日で参加。前日ハーサルの後神戸ハーバーランドのモザイクでバイキング料理を楽しむ、豪華な神戸メリケンパークオリエンタルホテルで宿泊し、次の日に本番という演奏旅行を何年も楽しんできました。そして二〇〇八年から山崎で始まりました「森の国オカリナフェスティバル」の実行委員会のメンバーとして、山崎文化会館に全国から集まってこられるオカリナ愛好家の皆さんをおもてなしするべく、オカリナ生活を楽しんでいます。

この度、宍粟市山崎文化協会に入らせていただき、新たな出会いがありますことを楽しみにしています。



デジタル教科書

平成会
伊藤和久

私はコンピューター関連の仕事をしてもらっていますが、日々の業務の中心はもっぱら市内の小中学校のパソコンやタブレットの活用支援やメンテナンスです。

数年前までは宍粟市の各学校にパソコン教室があり、子供達は日々のカリキュラムの中で、キーボードやマウスの使い方から始まり、文書作成や写真加工、インターネット検索など、いわゆるコンピュータリテラシーを習っていました。

では、現在はどうなっているかというと、パソコン教室は廃止になり、子供達には一人一台のタブレットが貸与され、必要に応じてドリル問題を解いたり調べ物をしたりと、コンピューターを道具として活用する方向に進んで来ています。

さらに、学習指導要領が改訂される数年後には児童・生徒用の教科書がデジタル化され、このタブレットの中に入ることが想定されています。

教科書がデジタル化されることについての功罪は多くの議論がされていますが、デジタル情報があふれる現代社会にあっては不可避、あるいは必然の流れと言えるでしょう。

将来のデジタル教科書像としては、複数の辞書が内蔵され、例えば漢字の読み方や意味、書き順なども文字をタップするだけですぐ表示でき、英語では単語の意味だけでなく発音を耳で確認できる等、デジタルならではの多角的な学習支援機能を備え持つと思われれます。

一方、デメリットも少なからずあります。教科書機能がクラウド上に置かれるためインターネット接続による個人情報漏洩が懸念されること。破損や故障、バッテリー劣化などの機器の不具合が起ること。そして、教科書データ自体は今まで通り無償であっても、四、五年ごとの端末機械の購入費まで国が見てくれるのかというコスト負担の問題等々です。「しろしろこいこい」で学び始めた世代にとっては多少寂しくも感じますが、現代社会を生き抜くために必要な教科書の進化形を待ち望みます。



令和4年10月 演目「梯子獅子」

持続可能な伝統芸能の継承を目指して

山崎郷土芸能保存会
宇原獅子舞保存会
井口浩一

宇原獅子舞保存会（以下、保存会）では、参加する若者が増え、伝統芸能が次の世代へと継承されています。私にとって、それは何より嬉しい事です。

現在、保存会の人数は三〇名程度ですが、その多くは二〇代の若者達

です。参加する若者が増えた背景には、性別や地域を越え、獅子舞に興味を持つ方を受け入れるというシームレスな組織体制の変革がありました。そして、確実な目標を持ち技術を磨いてきました。

お陰様で、令和四年九月には、文化庁の伝統文化支援事業に採択され、東京からキャンノンマーケティングジャパンが宇原獅子舞の動画撮影に來られました（動画はQRコードからご覧頂けます）。また、同日には東京文化財研究所無形文化財研究室長と兵庫県指定無形文化財審査員の方による視察もありました。宇原獅子舞では女性も獅子頭の舞わし手となりますが、それは国内において珍しい事でありジェンダー問題をクリアしている希少な獅子舞との事でした。

宍粟市の伝統ある獅子舞の一つである宇原獅子舞ですが、保存会では歴史的・学術的価値をより精査し、国内外に宍粟市の獅子舞の魅力を伝えていきたいと考えています。

これまでの約三年間、コロナ禍は保存会を成長させてくれる良い機会となりました。感染予防のため対面での打合せや練習が厳しい状況でしたが、そのお陰で、オンライン会議

や動画システムによる指導、練習、記録など新たなDX化を図る事が出来ました。

今後、宍粟市では、人口減や少子高齢化等、獅子舞に限らず伝統芸能を継承していく為の課題が多くあります。私達保存会では、地域情勢に対して常に解決策や改善策を追求して、時代と共に進化する事で、持続可能な伝統芸能の継承に努めて参ります。そして、先人たちの想いを次の世代へ繋ぐ事で、より宍粟市の伝統芸能の魅力を高めたいと願っています。



化動
文採
統採
伝業
庁事
文化
支援
画QR
コード

川柳破丸会

長川 伸介

先日、二〇二二年の世相を表す漢字に「戦」が選ばれました。近いところでは、サッカーワールドカップで世界の強豪を相手に堂々と勝利を収めた日本代表の熱い戦いが思い起

こされます。

しかし、この漢字が選ばれた一番の理由は、何といっても未だに終わりが見えないロシアのウクライナへの侵攻に他なりません。両国の罪のない多くの人々の命が今も奪われていることに心を痛めつつ、一日も早い平和な終結を祈るばかりです。

さて、今年の破丸会はそういった時事問題を扱った作品が減り、老いに対する自虐ネタや日常の失敗・不満等を題材にした作品が主流となりました。

いつものように、くすっと笑ってお仕事に励んでいただければ幸いです。

小生と 言うが態度の でかい奴
変わらんなあ 昔暴走 今逆走
孫の手じゃ 届かず孫の 手を借りる
戯れに 母を背負うな 癖になる

生田 大思案

八十路来て 残りはずかずか 二十年
この頃は 日記一行 「今日も家」
九十の 姉から電話 元気かと
分けあえと 言いたい程の 遺産なし

岸本 新風

注意書き 小さい文字で 読み切れず
白髪でも 羨ましいと ハゲが言う

割り勘に なったらそっと 居ない奴

お祝いは 母の日だけと ぼやく父

清水 三省

招待は したがまばらの 生前葬

湯上りに 昔はパック 今シップ

天からの 赤い糸待ち 五十年

ふられた日 空はカラリと晴れている

菅谷 美風

八十の 母の手習い 初スマホ

父送り それ以後母は 黄泉がえり

顔認証 化粧濃すぎて 非認証

為せば成る 暮れの掃除と開かずの間

高橋 忘剣家

行列の 長さで決めた クジ売り場

お互いに 理解できずも 金婚に

分け隔て なく育てた子 大差でき

成長は 腹周りだけ ほか退化

谷口 遊愉

宗教は 祭りに応じて 変えています

天高く 馬はおらんが 妻は肥え

窓際で 定年までの 時を待つ

七三に 分けてた頭 今は夢

谷口 柳幸

衣替え 気象庁から 指示が出る

彼岸花 律儀に知らせ 墓参り

嫌なこと 忘れることが 生き上手

知人かも？お互いマスクで すれ違い

千本 風筧

きいてない 人の話と 瘦せ薬

これ大事 あれも大事だ 捨てられん

年賀状 生存確認の 歳となる

聞こえるわ「今買い時」と 天の声

中居 絵師

ネットの世 肩身の狭い 広辞苑

墓じまい 考えながら 墓参り

孫だけが 寒いダジャレに 大笑い

朝風呂に 幸福感と 罪悪感

坂東 笑雅

良い夫婦 妻の愚痴には 上の空

天秤に かけられてたと 後で知る

帰りたい 三段腹に なる前に

在宅で 妻の地雷も 増えている

船元 哲心

話す度 大袈裟になる 武勇伝

携帯の 電波飛び交い 空過密

帰省して 変わらぬ町に 安堵する

時と金 どちらもすぐに 居なくなる

安井 楽庵

財布から 帰らぬ偉人が 今日も行く

空っぽの 頭と財布で 生きている

持て余す 妻と時間と 腹の肉

タイヤより 口につきたい 滑り止め

長川 酔伸

宍粟市山崎文化協会 役員及び団体名

会長	前野 良造
副会長	三谷 恭三
理事	宮脇 昭介
	秋久 澄子
	大谷 司郎
	田中 健三
	宇田 詔三
	三宅 哲朗
	小倉 庸永
	三谷 恭三
	下村 孝吉
	井上 智己
	鳥羽チエノ
	土方 研三
	辛川 健二
	岸本 幸子
	福井 茂
	藤永 幸正
	菅原 淳
	石田 陽子
	長川 伸介
	宇田 幸夫
	小林由佳子
	山本 修示
	竹内 謙
	加古玖美子
監事	前野 洋一
	菅原 淳

森岡芳子
山崎郷土芸能保存会
山崎郷土芸能保存会
山崎・いさわ冠句会
宍粟山崎手作の甲冑の会
宍粟市吹奏楽団
山崎郷土芸能保存会

事務局長 伊藤 次郎
事務局次長 谷林 哲哉
会 計 小西 美穂
(敬称略・順不同)

「やまさき文化」編集委員

編集長 大谷 司郎
委員 秋久 澄子 鳥羽チエノ
長川 伸介 野谷るり子
小西 美穂

事務局だより

今回の『やまさき文化』四十二号は加入団体よりすべての団体から明るい将来を暗示する投稿をいただきました。感染症を留意しながらも春の来訪とともにこれからリスタートしていこうという言葉が聞こえてきそう嬉しく思いました。

私事ですが、四十二年前にこの「やまさき文化」が創刊されました。その時、私は社会教育課に勤務させていただき文化担当としてこの創刊号に関わらせていただいたことを今でも記憶に残っています。二十九歳の若者でした。
やはり今と同じで当時の編集委員さんは産みの苦しみと言いますか内容や構成に苦労されておられました。このことを改めて思い出したのは本協会が作成しましたホームページです。催し物のお知らせ、芸能祭や

吹奏楽のコンサート合唱祭などの記録、そして「やまさき文化」の四十一号までのすべてのバックナンバー等々を掲載しており、一つの文化活動のコミュニケーションツールです。
今後も歴史、舞台関係、音楽、絵画、立体、自己啓発等々あらゆる場面の地域文化・芸術の創造に微力ながら掲載充実に努めてまいりたいと考えています。ご協力を。
事務局長 伊藤 次郎

編集後記

コロナ禍で多くの文化活動が抑制を受け、日常的な練習や会合ができなかったことに合わせ、会員の高齢化のなかで活動を休止・廃止した団体が四団体に上りました。しかし、新たに一団体が加入していただき、本号には二十一団体の活動紹介を載せることができました。

今回の巻頭小説として寄稿いただいた浅田耕三先生は九十歳を過ぎてもなおお元気で文筆活動をされています。前号掲載小説の少し後に神戸新聞文芸の小説部門で入選した「農村歌舞伎」を今回掲載させていただきました。戦後間もない頃、青年団が村芝居を興行した様子がよく読取れる興味深い小説です。
特別寄稿の大友美義(竹邦氏)は尺

八の魅力に取り付かれ、山崎を後にして五十年間、製作から演奏活動と国内外で活躍された証しを寄稿していただきました。山崎にも数回演奏に来てもらったことがあります。
また、帰郷して三年になる柳田芳伸氏にはマルサス人口論の研究を通して公共図書館の重要性についてエピソードを交え、メールを送っていただきました。

歌人協会が会員の高齢化で活動の幕を閉じられたことは本機関誌の発行に大きな痛手です。山崎の地に永々と築かれてきた文化の営みを今後も途切れることなく次世代へ繋いでいくのが我々の課題であると強く感じるこの頃です。
本誌にご寄稿いただいた皆様から敬意と感謝を申し上げます。
編集長 大谷 司郎

やまさき文化 第42号

令和5(2023)年3月25日発行

編集 『やまさき文化』編集委員会
発行 宍粟市山崎文化協会
事務局 宍粟市教育委員会事務局
社会教育文化財課内
印刷 (株)支林館印刷所



株式会社 山 弘

新築

リノベーション

リフォーム

住まいのこと、何でもお任せください



0120-12-8076

本社 / 宍粟市山崎町須賀沢704

■ はりまの杜 住宅展示場(姫路店) ■ たつの店 ■ 加古川店

● ホームページ

<http://www.yamahiro.org>

こちらからもご覧いただけます▶



ふじむら貸衣裳

人生の節目を飾る大切な一着を貴方に

結婚式はもちろん成人式・卒業式・七五三

また留袖や訪問着・喪服のご衣裳など

豊富な品揃えでお客様をお待ちしています。



兵庫県宍粟市山崎町山崎181 Tel:0790-62-0052 <http://www.fujimura-kashiishou.com>

贈り物に...「しそう杉ボールペン&シャープペン」

三菱鉛筆「故郷(ふるさと)の木持ち」シリーズは、地球温暖化と地域材振興策に「少しでも役に立つ商品」をコンセプトに作られた筆記具です。全国の都道府県産のスギ、ヒノキ、ヒバ、マツ等に高度な木材の加工技術を施したもので、適度な重さが高級感を醸し出しています。兵庫県では「しそう杉」が選ばれています。「しそう杉」のほのかな香りをお楽しみ下さい。



¥2,200(税込)

さらにレーザー彫刻(オプション)であなただけの1本に...

参加賞、記念品に...しーたんステーションナリー各種あります!

トクサヤ文具

山崎町山崎 180-1 TEL62-0067

ほっと、ひといき 伊沢の里

○お祝いの会食 ○法要後の会食・仕出し
その他各種宴会承ります

リラクゼーションルーム 好評稼働中

〒671-2517 宍粟市山崎町生谷214番地1 TEL0790 (63)1380



コエカメラ

Specialty Camera Shop

■ 本店 / 〒671-2576
宍粟市山崎町鹿沢26-3
TEL (0790) 62-2089 FAX (0790) 62-7429
E-mail info@ko-e-1972.com

■ 咲ランド店 / 〒671-2545
宍粟市山崎町中井10 咲ランドSC1F
TEL・FAX (0790) 63-0533
E-mail saki@ko-e-1972.com



森の妖精/ネーチャ

地域で最も信用・信頼される
金融機関をめざして

●豊かな街づくりをお手伝いする●



西兵庫信用金庫

<https://www.shinkin.co.jp/nisisin/>

TEL 0790-62-2020



森の妖精/サッキー

= お車と住まいの快適、なんなりと =

ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)

本社 宍粟市山崎町中井 96

石油・電力・洗車・バッテリー
タイヤ・オイル・カーリース

☎0790-62-4321

電気・ガス・水道工事・家電全般
住宅リフォーム・おそうじ代行

☎0790-63-1234

不動産のことならお気軽にご相談下さい

土地・建物・売買・仲介・マンション・アパート賃貸

株式会社ファースト商事 エイブル

親切丁寧をモットーに社員一同皆様のご来店をお待ちしております。



株式会社ファースト商事
エイブルネットワーク山崎店
宍粟市山崎町今宿21番4
TEL 0790-62-0001
FAX 0790-62-4787

株式会社ファースト商事 福崎店
エイブルネットワーク福崎店
神崎郡福崎町西田原1821番4
TEL 0790-22-1235
FAX 0790-22-1236

つくるでつなぐ



UEBAYASHI

上林建設株式会社

〒671-2554 兵庫県宍粟市山崎町御名226番地1

TEL.0790-62-2828 FAX.0790-62-7186



イメージキャラクター
けんちくん



各種新車・中古車・介護車両販売 リース 車買取
民間車検 整備 钣金・塗装 ボディーコート ETC

🔧まごころサービス🔧

光徳自動車販売株式会社

〒671-2542 兵庫県宍粟市山崎町船元242

TEL 0790-62-1780

E-mail: koutoku@gol.com